

令和2年度 厚生労働行政推進調査事業費補助金（慢性の痛み政策研究事業）
分担研究報告書

慢性疼痛診療システムの均てん化と
痛みセンター診療データベースの活用による医療向上を目指す研究

研究分担者 倉田 二郎 東京慈恵会医科大学麻酔科学講座 役職 教授

研究要旨

東京慈恵会医科大学附属病院ペインクリニックは痛みセンターを標榜し、身体科の医師と理学療法士、臨床心理士が協力して慢性痛患者を診療する体制を取っている。令和2年度においてもこの体制を継続し、多職種による慢性痛診療を行った。

A. 研究目的

慢性痛は身体・心理・社会的側面を持つ複雑な病態であるため、多職種による診療アプローチの有効性を検証するため。

B. 研究方法

当院ペインクリニックを受診する患者のうち全ての慢性痛患者に、初診時、その後3か月毎に各種心理物理質問票を記入させ、多職種による診療を行った。データには患者の個人情報が残らず集計に影響しないように配慮した。

C. 研究結果

3か月以上続く慢性痛を持つ患者は2020年度新患309名のうち242名であった。これらの患者の延べ5,800回の外来診療のうち、5.0%に理学療法士による運動療法を、1.3%に臨床心理士による認知行動療法を行った。患者らの反応、コンプライアンスは概ね良好であり、身体科医師による薬物および神経ブロック療法だけではカバーできない幅広い治療内容を提供することが出来た。

D. 考察

学際的診療は慢性痛診療に有効である。各種質問票による心理物理指標の記録は、そのアウトカムを検証するために有効なデータベースになると期待される。しかしその施設横断的集計が滞っているため、これを解決し大規模データから結果を導く作業が今後の大きな課題であると考えられる。

E. 結論

痛みセンターにおける学際的慢性痛診療は

有効である。様々な心理物理指標の施設横断的解析により治療効果の具体的内容を導き出す必要がある。

F. 健康危険情報

総括研究報告書にまとめて記載

G. 研究発表

1. 論文発表および書籍出版

- 1) 倉田二郎. 機能的磁気共鳴画像法による慢性疼痛の脳バイオマーカーを定義する. 医療機器学 2020; 90(3): 266-71.
- 2) 倉田二郎 (編著). 痛みのバイオマーカーとしての機能的脳画像診断法. 東京: 真興交易医書出版部, 372 pages, 2020年9月15日.
- 3) Yamamoto A, Hattamaru Y, Uezono S. Spontaneous intracranial hypotension associated with cerebral venous thrombosis detected by a sudden seizure: a case report. JA Clinical Reports 2020; 6: 59.

2. 学会発表

- 1) 八反丸 善康、肥田野 求实、臼井 要介. 選択的末梢神経ブロックによって運動機能を保持したまま腱鞘再建術を行なった一例. 日本区域麻酔学会第7回学術集会. 長野, 8月.
- 2) 八反丸 善康, 北村 俊平, 倉田二郎. 脊髄損傷後の痛みに対する脊髄刺激療法が奏功した2症例. 日本ペインクリニック学会第54回学術集会. 長野県長野市(Web開催), 2020年11月14-29日.
- 3) 倉田二郎. マルチモーダルMRIとオフセット鎮痛から慢性痛の何が分かるか. 日本ペインクリニック学会第54回大会, 長野県長野市

(Web開催), 2020年11月14-29日.

4) 倉田二郎. 機械学習が痛みを診断できるか?—脳画像のAI解析がはらむ危うさ—. 第31回日本臨床モニター学会総会, オンライン, 2020年11月21-22日.

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし